

主 論 文 要 旨

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	市 川 照 久
主 論 文 題 目： 協動的達成力を育む知的活動の場の構築				
(内容の要旨) 本論文に記す研究は、力を合わせて何かを成し遂げる能力（以下、協動的達成力と呼ぶ）を育むための知的活動の場を考案し、その効果を検証したものである。 近年、個人の能力を持っていても集団の中では力を発揮できない人が増えている。この問題に対して、グループ学習などの試みがなされているが、実際には、集まるだけでは不十分である。 本研究においては、その原因は自律的な協調関係の不足と継続的な取組みの不足にあると考える。その解決のために、自己決定的な協調活動を促す目標設定と活動成果を評価してフィードバックする場を継続的に構築することを提案する。本提案の有効性を検証するために、小学校、高等専門学校、大学、企業研究所の4つの環境で実験を行った。いずれにおいても、グループの知的活動が活性化され、協動的達成力を育む場となった。教育環境においては勉学意欲が高まり、発想の拡大につながることで、研究環境においては知的生産性の向上や受託研究の増加につながることを確認できた。 第1の対象は小学校である。算数の授業に、グループ学習を取り入れ、海外との遠隔協同授業における成果発表の場を与えた。その結果、競争心が高まり、相互に刺激し合って発想が広がり、協動的達成力を育む場となった。 第2の対象は高等専門学校である。知識工学の授業に、プロジェクト管理機能を備えたグループ学習を取り入れ、成果発表およびWebベースの質疑応答の場を与えた。その結果、活発な議論が起こり、能動的な学習が強化され、協動的達成力を育む場となった。 第3の対象は大学である。大教室で行う講義に、事前・事後のグループ学習を取り入れ、公開授業における成果発表の場を与えた。その結果、活発な質疑応答が起こり、勉学意欲が高まり、協動的達成力を育む場となった。 第4の対象は企業研究所である。日常の研究活動に、自部門の研究管理者が自ら設定したグループの評価指標による目標管理の場を与えた。その結果、グループの特許や論文が年々増加し、比例して受託研究も増え、協動的達成力向上につながった。 今後の課題は、目標の鮮度を保ち、活動を継続することである。また、教育においては教員の負荷低減のための支援ツールを整備すること、研究においては他の研究機関への適用可能性を検討することである。				